

◆ 第6回 牛群検診で病気は激減する

～限界ある検診実施可能件数～

近年の獣医学の進歩はめざましいものがあります。私が二十年前に就職した診療所の所長の言った言葉を鮮明に覚えています。

——聴診器と体温計の獣医師の時代は終わった。お前らはもっと勉強して新しい獣医療を展開しなければならない——。

この時代には農家から「血の一滴は乳の一滴」などと言われ、血液検査が当たり前の今日とは隔世の感があります。

現在、産業動物臨床は“生産獣医療”という方向性が明瞭（めいりょう）に打ち出されており、治療だけではやっていけない時代になりつつあります。「牛群検診は有料でなければ農家が真剣にならない」という認識が全国的に広がっており、牛群検診の農家負担は今後増えていくと思われま

す。牛群検診の採算ベースは、1日2戸で300,000万円、一方、NOSA Iや岩手大学が行う場合は、20頭を単位として農家負担額で現在、32,000円で、安いうちに利用した方がいいに決まっています。

検診担当獣医師は、土日や夜間、自分の時間を割いてデータを一生懸命に分析して飼料設計をしています。それを農家が“いつものサービス”という認識で軽く受け流してしまうと悲しいものがあります。

牛群検診は1回でうまくいくわけがなく、検診をして飼料を変更→また検診をして飼料を修正——これを繰り返しながら、獣医師と農家と一緒に勉強して牛群を良くしていく手段ですから、農家が担当者の飼料設計を全面採用しないということは、そこですべてが終わってしまうのです。

ですから検討会ではお互いが納得のいくまで飼料設計を修正することが必要になってきます。

実際、牛群検診データが読めて飼料設計できる獣医師は少なく、検診実施可能件数にも限りがあります。診療もしなければならない獣医師なら牛群管理をベースにした牛群検診で年間2戸程度、牛群検診だけなら2週に1戸程度が限界です。牛群検診だけ行っている岩大でも年間30戸が限界です。

牛群検診で指導を全面的に受け入れた牛群は病気が「激減」し、生産性は飛躍的に向上します。検診を効果的に行っていけば、獣医師が診療に追い回される状況も間違いなく激減するはずですが、検診の内容や農家の受け取り方が中途半端だと、担当獣医師の負担ばかりが増加します。

検診を有効利用して農家が生き残っていくためには、検診データが読めて飼料設計のできる獣医師を大切に、一緒に勉強していくことが重要です。

